

第10回福島市待機児童対策推進会議 議事録

- 1 日 時 令和3年11月4日(木) 14:30~15:30
- 2 場 所 福島市役所4階 庁議室
- 3 出席者 山崎 麻弥子委員、栗花 澄子委員、狩野 奈緒子委員、
黒澤 雄二委員、横田 智史委員、立花 由里子委員

- 4 内 容
- (1) 開会
 - (2) 挨拶
 - (3) 議事
 - (4) その他
 - (5) 閉会

5 概要

(1) 議事

- ・令和3年度待機児童対策推進パッケージの主な実績
 - ・保育施設における入所児童数の現状
 - ・令和4年4月1日 待機児童の解消継続に向けた取り組みについて
 - ・令和4年度待機児童対策推進パッケージ(案)について
- 会長挨拶、事務局説明の後に、質疑応答、意見交換

6 主な発言

○会長挨拶 委員の皆様には、日頃より本市の子育て支援策にご協力いただき感謝申し上げます。

また、ここ2年ほどはコロナと闘いながら、現場での子育て支援に取り組んでいただき、厚く感謝申し上げます。

本会議で皆様のご意見を伺いながら、待機児童対策緊急パッケージを策定し、待機児童対策を推進してきました。皆様のご尽力もあり、本年4月にはようやく待機児童ゼロを達成したことに感謝申し上げます。

今後、待機児童ゼロを長く続けていくというのが目標であり、本日はこれまでの対策の成果を皆様にお示しするとともに、今後どのような対策をとっていくかをご議論いただきたいと思います。

最近の入所状況ですが、昨年はコロナ禍により、申込みを控えていた「預け控え」が多かったことが見てとれます。今年は4月から10月にかけて申込児童数が500人増えている一方で、本市の出生数は減少していることか

ら、昨年申込みを控えていた方があらためて申込みをしたのではないかと考えられます。

10月時点の待機児童については、国の調査が廃止となったことから、事務負担等も踏まえ、正確な数値は算出できないこととなりました。試算では20名程度となり、昨年10月時点の待機児童数が42名ですので、一定の進展は見られたものの、やはり年度途中の増加を吸収するまでには至っていません。保育所等に預けやすい体制づくりのために、今後も施策の充実に取り組んでいかなければいけないと考えています。

皆様には昨今の保育現場の状況を踏まえながら、待機児童対策についてご意見を頂戴したいと思います。

なお、市が取り得る待機児童対策についてはかなり実施してまいりました。今後を考えますと、待機児童対策の1点のみだけでなく、幅広い子育て支援が求められると考えており、待機児童対策に焦点を絞ったこの会議については、今回を最後とし、今後の待機児童対策等については、社会福祉審議会児童福祉専門分科会の中で、幅広い視点で議論をしていくという方向でお含み置きいただければと思います。

○事務局 （資料に沿って説明）

○委員 令和3年10月時点の待機児童が20名ほどという説明だったが、市独自の計算によるものか。

○事務局 本市が独自に試算したところ20名程度であった。

○委員 国の調査は廃止になったということだが、今後の待機児童の分析は必要だと思うので市独自の調査でも継続していただきたい。

スライド5の「保育士の働きやすい職場づくり事業」について、市職員が現場へのヒアリング等をしていると思うが、現場のリアルな声にはどのようなものがあつたか。また、全体会議で議論された内容について聞きたい。

○事務局 保育職場ハッピー！大作戦と称して、職場での前向きな取り組みを引き出す事業を実施している。施設における取組みとして、シフトや体制を工夫して少しでも休憩時間を確保したり、子どもと離れて事務作業を行う、いわゆる“ノーコンタクトタイム”を作ったりするなどの工夫があつた。また、職員がお互いを褒め合い、感謝し合うなどの人間関係やコミュニケーションづくりをしているという声もあつた。現在、現場からの声を聞き取りながら全体会議の中で今後必要な取組みを議論しているところであり、「保育職場ハッピー大作戦！チームだより」を発行して、ヒアリングした好事例の周知などを行っていく。

○会長 10月時点の待機児童調査は無くなったが、4月以降待機児童の傾向がどう

なっているのか、市として確認するために今回独自に試算した。国の調査は細かく調査基準が設定されており、市独自の調査でどの程度の基準を設けるかという課題はあるが、私としては待機児童だけでなく入所保留児童を無くしていくことが次の大事なポイントだと思っている。自分の事情で保育施設への入所を見送る方を除き、入所保留児童数をできるだけ減らしていくというのが我々の政策課題である。

○委員 保護者から聞いた話によれば、希望しているのが人気の保育園だから預けられないという問題のほか、就職が決まらないために保育園に預けられない、預けられないから復帰できないというような声を聞く。保育所の入所説明と就職セミナーを、同時開催的に開催できないかと思う。

○会長 どちらかという就職セミナーは新卒採用向けのものが多いため、新卒採用の方で子育てもというケースがあまりないのではないか。中途採用の方向向けのセミナーでということであれば、同じ会場でなくても必要に応じて保育所入所の説明などは行うことができる。また、保育園を希望する方が希望する保育園に入れるようになればそういった悩みは解消されると思う。

○委員 入所保留児童数が269人という数字も出ているので、保育施設の新設は、ぜひやっていただきたい。

○会長 公立保育施設などの老朽化もあり、子どもが大切にされているという実感が見えづらいということもある。今後建て替えもやらないといけない。耐震基準のクリアはもちろんだが、建て替え後の施設の形態や体制については、民間施設の経営等に配慮して、待機児童対策にプラスになるように取組みを進めていきたい。

○委員 スライド10の入所保留者数とあるが、どのぐらいの児童がいて、どんな風に変動しているのか見ると対策が打てる。今年は3歳児以上のお子さんが見学によくきた。そこで私立幼稚園や認定こども園を案内してあげたりするのだが、福島市の幼児教育・保育のシステムがよく分かるようになればと思う。

また、保育ニーズはあるのだが、家庭の状況や子どもの状況などの理由によって施設に預けられないというケースがある。様々な子どもがいると思うが、教育や保育の機会をなるべく提供してあげたいと思っている。公立幼稚園では令和4年から長期休業中の預かり保育についても取組みを開始予定であり、心身に課題を抱えている子どもを受け入れていきたいと思う。また子どもの年齢に応じてどういった幼児教育・保育の提供が受けられるのか、全体像が分かるようにしていただきたい。

保育士の確保については、事業の成果が出ていて嬉しく思う。幼稚園で勤務している方の中にも、保育士になりたいという方もおり、そういった方への支

援についてもぜひ考えてもらいたい。

そして、待機児童がゼロになりとても嬉しく思う。今後は幼児教育・保育の全体的な取組みが必要ではないか。

○会長 私立幼稚園協会はいくつかの広報誌等を作成しているようだが、福島市の幼児教育・保育施設の全体像が市のホームページを見ても現状がわからない。

県外から若い世代を呼び込もうとしても、福島市の子育てと教育はどうなっているのか分からないのでは、福島市に転入する気にならないだろう。市の子育て支援策、幼児教育の全体像がわかるホームページの作成や、これをベースにした広報など、できるだけ早急に抜本的に改善していきたい。

また、スライド11には申込児童数しか載せていないが、年齢別の児童数を個々に把握し、あるいは家庭内で子どもを保育している保護者の方がどのくらいいるのかを把握しながら、子育て支援策を打つことが大切であると思っている。

そして、今ほど話にもあったような保育士の養成については、保育士等の就職に関するオンライン相談や、補助的な立場で働いている方への支援をしていきたい。

それから、私が今考えているところでは、ひとり親、特に女性のひとり親の家庭は生活基盤が弱く、これを保育や介護などの資格職・エッセンシャルワーカーへ誘導できないかと考えている。ひとり親家庭の収入基盤を強化し、保育士等の確保につなげられないか検討している。

○委員 保育士や幼稚園教諭を養成する立場から発言させていただきたい。就職後3年以内の保育士の離職率が高く、これは全国的な問題である。パッケージ案の若手離職防止のためのメンター制度だが、保育士の相談制度は大事である。就職した後に、辞めたいと学生が大学に相談するケースもある。

また、全国的に保育者を目指す学生が減少している。人口減の影響もあるが、昨年はコロナ禍で保育者を目指す学生が1割以上減った。大学側でもどうすればよいか考えているが、やはりコロナ禍における現場の厳しさというのが表に現れやすい状況にあるのではないか。ただでさえ責任のある仕事で待遇が厳しい仕事だ。コロナにより保育者を目指す学生が減少することを危惧している。保育者を目指す方が夢を持てるような保育現場の広報があるとよい。

○会長 特に高卒者の就職は社会全体として大変な問題になっている。現実を受け止めながら、学生の励みになる広報等の取組みをしていきたい。コロナ禍で保育現場はとても厳しい状況だった。保育士の対価が安いという点については、国が公的単価を見直すという発表も出ているので、少しでも改善されてほしいと思っている。

また、メンター制度については、気軽に話ができる相手づくりということを考えている。若手保育士の日常的な心の支えになってもらいたいと思う。

○委員 ①今回で会議が終了ということだが、市長を中心として今後も様々な対策を続けてほしいと思う。保育職場のハッピー！大作戦では、市の職員が施設の内部を見て、ヒアリングの中で休憩の取り方などについて自分自身も気づくことがあり、できることから少しずつ改善策を講じられた。今後も継続してもらいたい。

②オンラインの就職相談セミナーを経験した。コロナ禍においては職員を外に出すのも大変なので、研修などは積極的にオンラインでやってもらいたいと思った。

③また、AIによるマッチングについては、きょうだいバラバラになっているケースが多く気になる。同施設に入所できれば理想的だが、同じ施設に入所できなくとも、地域型保育施設等に入所し、3歳児になったらきょうだいが入所している施設に優先的に転園できるようにするなどの取組みはどうか。また、施設間でのやりとりによってマッチングも可能ではないかというケースもある。

○事務局 ③きょうだい別な施設に入ると保護者の負担が大きいという点については承知している。きょうだいの優先については、加点などの方法が考えられると思うが、保護者の負担を軽減できるような方法を模索していきたい。

○会長 この会議を最後とすることにあたって、やって良かったことは、市長である自分が会長になり、現場の実情を把握し、スピード感を持って施策を講じることができた。また、こういった会議を公開の場で行えたということも良かった。

今後、自分自身がこうした会議の場で、現場からの声を聞きとるといったことは、他の機会でも取り組んでいきたい。

○委員 1号と2号・3号の子どもでは、前日熱があった場合に、保護者によって登園させるのか、登園させないのかの対応が異なる。そのため、病児保育というのがもっとあってもよい。待機児童がゼロになり、今後は教育や保育の質が重要になってくる。私たちも頑張っていきたい。

また、施設に実習に来た学生に、大変なこともあるが、それ以上に楽しい仕事だということを伝えられるように、職員には気を配ってもらっている。

○委員 当社でも、久しぶりに育児休暇をとりたいという社員が出た。うれしいことなので、社を挙げて応援しているが、彼女は自分の希望している施設にちゃんと入れるかということに心配している。これまで様々な施策を掘り起こし、実績をあげて待機児童がゼロになったが、保護者が保育施設へ入所申込をする際の情報発信は丁寧に行ってもらいたい。

また、これまで待機児童対策に特化して考えてきたが、今後は子どもの育ちを全体的に向上させていく施策を行ってもらいたい。

○会長 待機児童ゼロは委員の皆様のご協力があったからこそ達成できた。病児保育は大事なことだと思う。今回はコロナ禍において、保護者が積極的に休みを取得した傾向が強かったと思う。

また、最近障害のある子どもの入所申込が増えてきている。障害のある子どもを保育施設で受け入れるためには十分な人手が必要であり、今後その体制づくりをしていく必要がある。保護者が希望する保育施設への入所しやすさにもつながることだと思うが、全体的に子育て支援行政を進めていきたい。

それから、保育を必要とする地域は時とともに変わってくると思う。かつては宅地開発はあまりなかったが、今後は宅地を開発していかないと人口は増えていかない。現在も3つの地域で開発が進んでおり、街の中心部ではマンションも増えてきている。また、市営住宅などは高齢者が入るイメージが強いが、再編整備して若者世帯に供給できるものを増やしていきたいと考えている。

最後に、本日皆さんにいただいたご意見を踏まえ、4月における待機児童ゼロの継続や、きょうだいと一緒に入所できるかたちでの入所保留者の減少など、子どものえがお条例に書いた目的が達成できるよう、今後も引き続き取り組んでいきたい。